

大日本史論贊集について

土屋博

「漢和両文 大日本史論贊集 完」贈正一位水戸義公源光圀朝臣遺著、山陽頼襄先生抄本、朝比奈知泉先生校閲、井川巴水先生和譯

(大正書院、大正五年刊、正價金貳圓五拾錢、六〇二頁)

水戸の藩主徳川光圀(徳川家康の孫、一六二八年生れ、一七〇一年歿)、少壮史記の伯夷傳を讀みてその高義を慕ひ、修史の志あり。彰考館を江戸の別邸に開きて四方の碩學を招聘し史料を天下に搜りて神武天皇より後小松天皇に到る國史を編修せしむ。これ「大日本史」にして、明治三十九年に到りて完結し、三百九十七卷に及ぶ。

本書大義名分を明かにし勸懲並び存するを期す。神功皇后を后妃傳に入れ、大友皇子を帝紀に列し、南北正閏の論を立てたるは、その三大特筆と称せらる。

「大日本史」は其の名前こそ有名なれど、大部かつ漢文のため、讀む機会甚だ乏しけれど、本書は一冊にて、かつ、読み下しの和文も附されければ、概要を知るには又と無き恰好の書物なりと信ず。

凡例に曰く、「本書に掲げたる論贊は文化六年(一八〇九年)大日本史中より削除せられ、現行大日本史には論贊無し。(此論贊を附したる大日本史は享保五年(一七二〇年)幕府に進獻せらる。)'、「本書は國史の大體に會通するに足る而已ならず、明治三十三年明治天皇より「名分を明にして志を筆削に託し正邪を辯じて意を勸懲に致せり」との勅語を賜り、徳川光圀卿の原著なれば、各學校の参考書に適當なるを信ず。」「本書論贊は頼山陽が『大抵文體は歐陽玄に似て奔放肆大之に過ぐ』と評せし如き雄作なれば亦漢文を學ぶ者の軌範と爲すに足れり」と。

目次は以下の如し。

本紀(神武天皇紀贊より後小松天皇紀贊まで)

(冒頭部分の引用、「贊に曰く、太祖壤を開き世を經め、烈聖徳を播き民を育す。然れども肇造の初め區宇の廣き遐方拡俗、猶ほ或は王化に服せず」。)

皇妃傳(垂仁狭穗姫皇后より後醍醐藤原皇后まで)

皇子傳(日本武尊より後醍醐諸皇子まで)

(聖徳太子厩戸傳よりの引用、「贊に曰く、皇太子厩戸聖徳の称あり。其の聡敏穎悟世人に度越すること従て知る可し。然れども諸を載籍に考ふるに施爲多く人心に厭ざるもの有り。敏達佛を好まず。」)

皇女傳、諸臣傳、將軍傳(源頼朝、足利尊氏など)、將軍家族傳(新田義重、源義経など)、將軍家臣傳、文學傳、歌人傳、孝子傳、義烈傳、烈女傳、隱逸傳、方技傳、叛臣傳、諸蕃傳(隋唐宋元明、新羅、高句麗、百濟など)

(諸蕃百濟傳贊よりの引用、「贊に曰く、三韓鼎立して其の最も馴良郷化せしもの、百濟に

過ぐるは無し。誓つて西藩となりし以來、歳貢絶たず間闕貢あれば、即ち朝廷使を遣はし之を讓む。」

(令和三年三月四日受附)